岩倉城遺跡下層出土の古墳時代前半期の遺構と遺物

服部信博

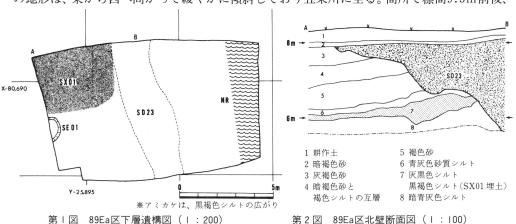
はじめに T

昭和63年より発掘調査を実施している岩倉城遺跡は、戦国期の岩倉城の時代を中心とす る遺跡であり、調査自体もそれを明らかにすることを主目的としてすすめられてきた。今 回、五条川左岸の89 E a 区下層において、新たに古墳時代前半期の遺構を確認し、それに 伴う古式土師器が一括して出土した。

尾張地方は、東西日本両文化圏の境界に位置し、その調査・研究動向は各時代を通して 常に注目される地域といえる。しかしながら、当地方における古墳時代前半期の遺跡の調 査は、僅かに清洲町廻間遺跡^(注1)・稲沢市塔の越遺跡^(注2)・名古屋市若葉通遺跡^(注3)など数例 あるのみで、研究を進めていくうえでの資料不足の感は拭えない。そういった状況のなか で本遺跡より一括して出土した土器は、当地の古式土師器編年研究に欠くことのできない 貴重な資料と考えられ、以下、調査によって判明した遺構・遺物を中心に報告していきた い。また、従来より注目されてきた西北出遺跡出土資料に関しても、調査する機会を得た ので、併せて紹介していくことにする。

岩倉城遺跡89Ea区下層の遺構

岩倉城遺跡89 E a 区は、五条川左岸の自然堤防上に設定した調査区である(^{造4)}調査区周辺 の地形は、東から西へ向かって緩やかに傾斜しており五条川に至る。高所で標高9.5m前後、



第2図 89Ea区北壁断面図(I:100)

低所で8m程であり、89Ea区は、その最も低い五条川沿いに位置する。以下、層位及び 検出遺構について概述する。

(1)層位 (第2図)

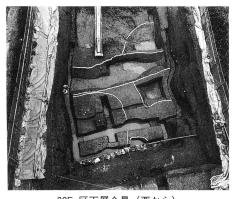
89 E a 区の層位状況は、第 2 図に示した通りであり、岩倉城期の遺構は、第 3 層上位から掘り込まれている。本稿に直接拘わってくる層位は、標高 6 m前後の第 6 層 ~ 第 8 層であり、第 6 層は、古墳時代前半期の土器を多量に含み遺物包含層となる。第 7 層は、灰黒色シルト層で当該期のベース面であり、この層の上位で遺構を検出した。第 8 層では、明確な遺構は認められなかったが、第 3 図に掲載した欠山期の遺物のみが出土した(#5)炭化物

を多量に含んでおり、弥生時代末期の生活面 であったと考えられる。

(2) 遺構(第1図)

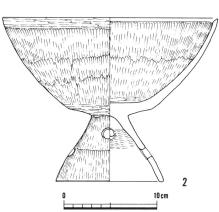
検出した遺構は、当該期に形成された集落の縁辺部に位置すると考えられ、土器集積遺構(SX01)、井戸状遺構(SE01)及び旧流路(NR)がある。

SX01 発掘区西端で検出した土器集積遺構である。これに伴う明瞭な掘り込み等はなく、径4~5 m前後の自然に形成された窪地状の落ち込みに、多量の炭化物を含んだ黒褐色シルトが、恰も充填したごとく堆積していた。遺物は、この黒褐色シルト内より、壺・甕・高杯・器台・鉢などが、人為的に置かれた状



89Ea区下層全景 (西から)





第3図 第8層出土遺物(1:4)



SXOI出土状況(南から)

況で出土した。

SE01 遺構の大半が調査区外となり、全形は不明だが、径約1.5mを測る円形の井戸状遺構と考えられる。ほぼ垂直に掘り込まれているが、0.7m程掘り下げたところで湧水が激しくなり、壁面が崩壊したため、井戸底、内部構造等は確認できなかった。埋土中より、甕・高杯・鉢などが少量出土した。

NR 岩倉城が五条川に接して築城されているため、89年度調査区の多くで旧流路の痕跡を確認している。Ea区下層で確認した旧流路の対岸は89F区内にあり、幅約50mを測る。時期については、遺物の出土がほとんどみられず決め手に欠けるが、遺構等の関係より、弥生時代後期以降と考えられる。

III 岩倉城遺跡89Ea区下層出土遺物について

(1)S X 01出土土師器 (第5図)

総数18点の古式土師器が出土した。土器の出土地点は第4図に示した通りであるが、それらは、人為的に置かれた状況で出土した。また、小型丸底土器・小型器台・小型鉢の所謂"小型精製土器3種"は、一定の範囲内よりまとまりをもって出土しており、注目される(性6)以下、大まかに壺、甕、高杯、器台、鉢に分類し、説明を加えていきたい。

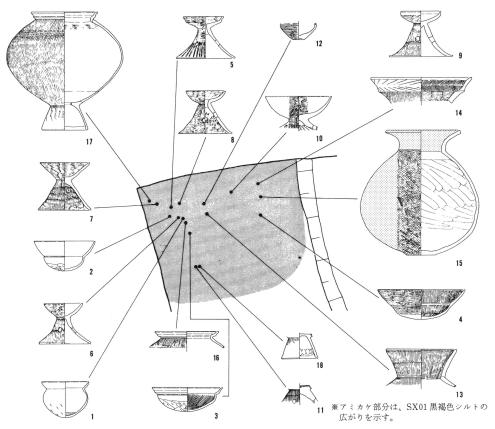
壺(12~15) 12のようなミニチュア品もみられるが、広口壺と直口壺に分けられる。 〈広口壺〉 14は、所謂柳ヶ坪型壺の口頸部片である。口頸部なかほどで屈曲、外反し、 有段口縁となる。口縁内外面に櫛歯刺突の列点文を羽状に施し独特な文様をつくり出す。 15は、体部から強く外反する口頸部を有する。体部最大径は下半部にあり、やや下ぶくれ 状の形態を呈する。頸部と体部の境界には一条の凹線を巡らす。外面は横ナデ、ヘラミガキ 等によって調整し、体部内面は板状具によるナデで仕上げる。外面及び口縁内面は赤彩で 飾り、胎土はよく精選されており、乳白色の色調を示す。

〈直口壺〉 13は、やや外傾し直線的にのびる口頸部を有するもので、体部以下は欠損する。 頸部と体部の界には一条の凹線を巡らし、内外面とも丁寧なタテ方向のヘラミガキを施す。 甕 (16~18) すべてS字状口縁台付甕 (以下、S字甕) であり、他の形態を呈するもの はみられない。S字甕分類の指標となる口縁部の形状は、16・17ともに口縁中段以上が上 外方へ大きく拡大し、端部は肥厚する。また、体部との屈曲部に明瞭な凹線が認められ、 これらの特徴より、赤塚次郎氏分類^(柱7)のC類に相当する資料と思われるが、全体的に器壁 が厚化し、体部最大径も下方に移る傾向が認められる等より新しい様相を示している。17 は、全形を窺うことができる。全体的に器壁は肥厚し体部最大径は中位にある。外面の調 整は、ハケを3~4回に分割し、右下から左上に引き上げた後、口縁部との屈曲部から左

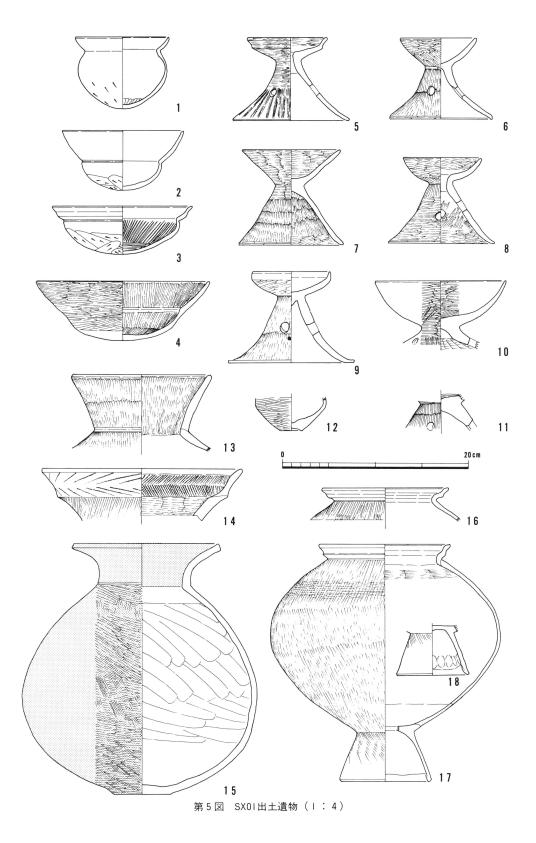
下に引下ろして羽状様にし、さらに体部上半部に横位のハケを施している。内面は、部分的に横ハケの痕跡を残すが、ナデにより平滑に仕上げられている。台部の端部は折り返す。 18は台部のみ残存しており、17と同様端部は折り返して整える。

高杯(10・11) 10は、半球状の椀形を呈する深めの杯部に、大半は欠損しているが、裾部径が杯部口径を凌駕するほど大きく開く脚部を有するものである。内外面とも細かいへラミガキ調整が施される。11は、脚部上半部しか残存していないが、10と同様の形態になるものと考えられる。

器台(5~9) 5点出土したが、いずれも口径・器高とも8~10cm程度の小型器台である。7を除き、緩やかに外反しながら裾が大きく開く脚部を有する点は共通しているが、受部の形態はそれぞれ異なりバラエティに富む。5は、脚部から鋭く屈曲する皿状の受部を持ち、口縁は立ち上がり、外反する。貫通孔を有する。6・8は、半球状の浅い受部を有するもので、8は貫通孔を穿つ。9は、畿内系と考えられ、やや丸味を帯びた受部に、つまみ上げた口縁部を持つ。7は、直線的に外方にのびる受部及び脚部を有するもので、山陰系鼓形器台の影響を強く受けたものと思われるが、脚部がやや長脚の傾向をみせる。



第4図 SX01土器出土地点(1:8、土器1:4)



いずれも外面の調整はヘラミガキ、内面はナデまたはヘラミガキを施す。胎土はよく精選 されており、焼成も良好なものが多い。黄褐色・黄白色を呈するが、9のみ淡赤褐色の色 調を示す。

鉢(1~4) 器高に比べ、口径が著しく大きいものを鉢類としてまとめた。小型丸底土器を含む四種類の器種が存在し、すべて丸底状の底部を有する点で共通する。1は、丸味を帯びた体部に、内湾気味に外方へ開く短かめの口縁を有する。体部下半はヘラケズリ、他はナデを施し平滑に仕上げられている。2は、小型丸底土器・坩などと称されるもので、扁平な球状の体部に、口径の大きく内湾気味に外方へ広がる口縁部を持つ。口縁部と体部の境界には、一条の凹線が巡る。体部下半はヘラケズリで、その他はナデにより薄く平滑に仕上げられる。3は、畿内系の小型鉢である。浅い椀状の体部に2段に屈曲して外反する独特な口縁部を有する。体部下半はヘラケズリ、また、内面には暗文風の細いヘラミガキが施される。4は、浅い扁平球の体部に大きく直線的に外方へ広がる口縁部を持った浅鉢と称されるものである。内面中位で稜をつくり、口縁と体部を区別する。外面は底部付近を除き横方向のヘラミガキ、内面は縦方向のヘラミガキで調整する。1~4いずれも胎土は、よく精選されており、焼成も良好である。色調は3が赤褐色を呈する以外、黄褐色・黄白色を示す。

(2)S E01出土土師器 (第6図)

甕3、高杯1、鉢2の計6点が埋土中より出土した。

甕(4~6) S字甕のみ出土した。口縁部の形状は、4~6いずれも口縁中段以上が上

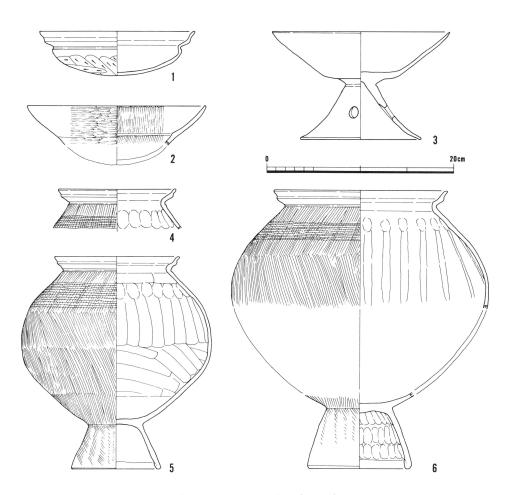
番号	器種	法	法 量 (cm)					色 調	焼成	備考
番写	帝 悝	口径	器高	高 体部径 底 径 脚 径	胎 土	巴 調	X充 X	加 与		
1	鉢	9.8	7.6	9.4			砂多いが精緻	黄白色	良 好	
2	小型丸底土器	12.8	6.4				"	淡黄褐色 "		
3	鉢	15.0	5.2				"	赤褐色	"	畿内系
4	鉢	18.4	6.4				"	淡黄白色	やや軟質	
5	小型器台	8.4	8.9			12.3	"	淡黄褐色	良 孔	透孔3ヶ所
6	小型器台	8.1	8.7			11.0	精 緻	黄褐色	"	透孔3ヶ所
7	小型器台	10.4	10.2			11.1	砂多いが精緻	淡黄褐色	"	
8	小型器台	8.4	9.2			11.3	"	"	"	透孔4ヶ所
9	小型器台	8.4	9.7			13.6	"	赤褐色	"	透孔3ヶ所
10	高 杯	14.0	_			_	砂多い	淡茶褐色	"	透孔3ヶ所
11	高 杯	_	_			_	"	淡褐色	"	透孔3ヶ所
12	ミニチュア壺		_	7.7	2.4		"	裼 色	"	
13	直 口 壺	14.6	_	_	_		砂多いが精緻	黄白色	"	
14	広 口 壺	21.4	_	_	_		1mm大小石含む	淡赤褐色	"	柳ヶ坪型
15	広 口 壺	15.4	26.9	25.0	6.0		砂・小石含む	乳白色	"	赤彩壺
16	S 字 甕	13.4	_	_		_	"	茶褐色	"	
17	S 字 甕	14.2	25.2	24.8		9.4	"	褐 色	"	
18	S 字 甕		_	_		7.4	砂多い	"	やや軟質	

第 | 表 SX0|出土古式土師器法量表

外方へ拡大し、端部は肥厚する。また、体部との屈曲部には凹線が認められ、全体的に器壁も厚化しているところから、赤塚分類 C 類の新相に相当しよう。5 は、全形を窺うことができ、体部最大径は中位にある。外面は羽状様の粗いハケ及び上半部に横ハケを施し、内面は板状具によるナデにより平滑に仕上げる。6 は、体部下半を欠損するが、5 と同様の形態を呈すると思われる。

高杯(3) やや短かめの外反する脚部に、外傾しながら直線的にのびる浅い杯部を有するもので、内外面ともナデにより仕上げられる。

鉢(1・2) 1は、畿内系の小型鉢で、椀形の浅い体部に、2段に屈曲し外反する口縁 部を有する。体部下半はヘラケズリを施す。2は、体部を欠損するが、大きく外方に広が る口縁部を持つ浅鉢である。内外面ともヘラミガキ調整される。



第6図 SEOI出土遺物(I:4)

T. 17	00		種	法				量 (cm)					77.	År Sm	Т	Laboration in	/++-				
番号	器			口	径	器	高	体部径	底	径	脚	径	胎 土	色	色 調		焼	成	備	考	
1		鉢		16	.6	4.8							砂多い	が精緻	黄	白色	4	良	好	畿内	系
2		鉢		19	.2	-	-						精	緻	淡	澄色	5	11			
3	高		杯	19	.0	11	.5				12	.8	砂多い		淡〕	黄褐色	5	"			
4	S	字	甕	12	.4	-	-	_			-	_		"	黄	白色	5	1.			
5	S	字	甕	13	.3	22	.8	20.2			9	.3		"	裼	é	9	1.			
6	S	字	甕	18	.4	(30	.0)	27.4			10	.6		"		"		1	,		

第2表 SEOI出土古式土師器法量表

IV 西北出遺跡溝B出土の古式土師器について

(1)西北出遺跡の概要(注8)

西北出遺跡は、岩倉市大地町西北出に所在する。昭和45年に浅野清春氏らによって調査がなされ、弥生土器・土師器等を出土する溝 3 条、土坑 2 基が検出された。とりわけ、幅80cm、深さ43cmの溝 B と称された遺構からは、古墳時代前半期に属する土師器が比較的まとまって出土し、一括資料に恵まれなかった尾張地方の古式土師器編年を考えるうえにおいて資料的価値の高いものとされてきた。

今回、岩倉城遺跡下層出土遺物整理の過程で、浅野清春氏、岩倉市教育委員会の御配慮により、未公表資料も含め、再実測する機会を得たので紹介していきたい(tell)

(2)西北出遺跡溝B出土の古式土師器(第7図)

溝Bより出土した古式土師器の総数は、壺1、小型丸底土器1、甕7、高杯8の計17点である。

壺(2) 口縁部のみが残存する。口頸部のなかほどで若干屈折し有段状となるが、顕著な外反は示さない。内外面ともにヨコナデにより調整する。また、内面に部分的ではあるがススが付着している。

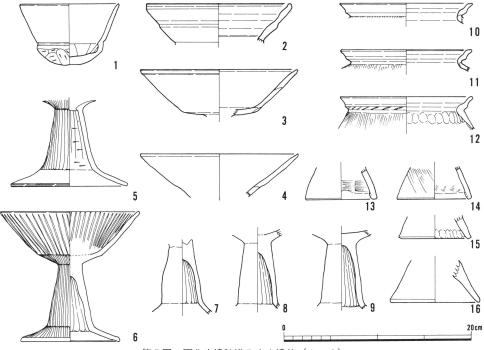
小型丸底土器 (1) 扁平球の浅い体部に、大きく外方へ開く口縁部を持つ。頸部付近の くびれは弱く、口縁部と体部との境界に一条の凹線を施し画す。体部外面は、不整方向の ヘラケズリ、口縁部内面は、ハケを施した後、ヨコナデ調整する。また、体部内面の調整 は指オサエのみで完了しており、調整技法の省略が目立つ。

甕 (10~16) S字甕 (10~14) と「く」の字状に外反する口縁部を有する台付甕 (15・16) とに分類できるが、いずれも細片ばかりであり、全形の窺える資料は1点もない。10~12は、S字甕の口縁部片である。端部が肥厚する傾向が認められ、10・11は明瞭な平坦面を有する。13・14は、器壁の厚い台部片であり、端部を折り返すというS字甕の特徴を持つ。すべて、赤塚分類D類に相当する資料であろう。また、15・16は、台部端部の折り返しが認められず、所謂「く」の字甕と考えられるが、S字甕と同様に器壁は肥厚している。**高杯** (3~9) 出土資料中最も多いのが高杯である。すべて、脚部が裾部付近で屈折し

てひろがる当地域に系譜のおけない所謂"畿内型高杯"で占められる。6のみ全形を窺うことができる。杯部は、口縁部が直線的に外方へ開き、脚部は、徐々に広がる中空の柱状部から鋭く屈折して裾部へつながる。杯部内外面は、暗文風のヘラミガキが、脚部外面には縦方向の面取り風ヘラミガキ(ヘラナデ)が施されている。他に、内外面ともヨコナデ調整された杯部片(3・4)、裾部が鋭く屈折して開く柱状脚部片(5・7~9)があり、5は脚部内面に回転ヘラケズリを施す。

番号	器	種	法			量 (d	em)	胎土	<i>t</i> z. ∃⊞	Jate 144	備考	
留写		悝	口径	器高	体部径	底 径	脚 径	1 1 工	色調	焼 成	加 专	
1	小型	丸底土器	10.5 6.5					小石を含むが精緻	赤褐色	良 好		
2	広	口 壺	15.3 —					精 緻	褐 色	"	有段口縁壺	
3	高	杯	16.8 —				_	"	淡赤褐色	"		
4	高	杯	16.8 —				_	砂含む	赤褐色	"		
5	高	杯	_				12.4	"	淡赤褐色	"		
6	高	杯	14.7	13.9			10.6	精 緻	赤褐色	"		
7	高	杯	_	_			_	小石含む	淡赤褐色	"		
8	高	杯	_	-			_	微砂含む	"	"		
9	高	杯	_	_			_	砂含む	淡黄褐色	やや軟質		
10	S	字 甕	14.1	_	_			"	淡赤褐色	良 好		
11	S	字 甕	14.0	_	_			砂・小石含む	淡黄褐色	"		
12	S	字 甕	14.2	_	_		_	小石含む	褐 色	やや軟質		
13	S	字 甕	_	_	_		7.4	砂・小石含む	淡褐色	<i>,,</i> .		
14	S	字 甕	_	_	_		8.0	砂含む	淡黄褐色	良 好		
15	<	字 甕	_	_	_		7.0	砂・小石含む	淡赤褐色	やや軟質		
16	<	字 甕	_	_	_		9.4	"	淡褐色	"		
注8	高	杯	16.4	_			_				注8文献より	

第3表 西北出遺跡溝B出土古式土師器法量表



第7図 西北出遺跡溝B出土遺物(I:4)

Ⅴ まとめ

以上、岩倉城遺跡下層より検出された遺構・遺物及び西北出遺跡溝B出土資料について 概述してきたが、それらに若干の検討を加えてまとめにかえたい。

1 土器集積遺構 S X 01 について

岩倉城遺跡下層より検出された土器集積遺構の特色をまとめると次のようになる。

- ①自然地形をそのまま利用し、改変を加えていない。
- ②窪地状の落ち込みに堆積した埋土の中に多量の炭化物を含む。
- ③土器は人為的に置かれた状況で出土した。

以上の3点が、その特色としてあげられ、なかでも②・③はヒトの意識的な行為が伴って初めて起こる現象であり、単なる土器廃棄とは違った遺構の性格付けが要求されよう。 遺構検出地点周辺の環境・出土土器の様相等からその一端を探ってみたい。

遺構検出地点は、標高6m前後の自然堤防と旧流路との変換点に立地しており、安定した日常生活を送るには非常に不向きな場所に遺構は占地していると言えよう。そして、西方に広がる自然堤防上には居住域が、旧流路の対岸の微高地上には墓域が展開している可能性が強く(**10)つまり、居住域と墓域とに挟まれた集落の縁辺部に形成された遺構と考えられる。

また、SX01より出土した土器を検討してみると、祭祀的色彩の強い土器とされる小型精製土器3種、ミニチュア壺、赤彩で飾る広口壺などが、出土土器全体の6割以上を占めるという高率を示し、遺構の性格をその出土状況と併せて考える時、極めて示唆的である。河川に接し、不安定な集落縁辺部への立地、祭祀的色彩の強い土器の存在等、この遺構は、日常生活のなかで使用されたとは考え難く、一般生活から遊離した当時の「非日常的」部分を語る遺構と思われる。

2 岩倉城遺跡下層出土遺物の編年的位置付け

出土土師器の編年的位置付けを考えるにあたり、まず、SX01・SE01出土土師器の時間差の有無を確認しておきたい。

土器の組成をみると、SX01からは、壺・S字甕・椀状杯部を有する高杯・小型器台・小型丸底土器・小型鉢と各器種を網羅する土器が出土している。それに対し、SE01からは、S字甕・脚部が外反する高杯・小型鉢の3器種のみであり、欠落する部分も多い。そこで、SX01・SE01に共通する器種であるS字甕と小型鉢に注目してみると、S字甕に関しては、SX01・SE01共に赤塚分類C類の新相に相当し、器形等も大差はない。小型鉢についても、畿内系の口縁部が2段に屈曲するタイプと、口縁部が外方に大きく開く浅

鉢と称される2つのタイプが、それぞれの遺構より出土しているが、やはり形態等に差違は感じられない。よってSX01・SE01出土資料は、ほぼ同時期の使用を示す一括資料として捉えることができよう。

以上の前提条件に立ってSX01・SE01出土土師器の特徴をみると、次の諸点があげられよう。

- ①柳ヶ坪型壺が存在する。
- ②S字甕は、全体的に器壁の厚化が目立ち、C類でも新しい様相をを示す。
- ③SE01から、脚部がラッパ状に外反する高杯が出土している。
- ④小型精製土器3種が揃っている。
- ⑤小型器台の形状が多様化する。

これらの点より、SX01・SE01出土資料は、S字甕分類を基本とした赤塚次郎氏編年の元屋敷様式後半塔の越SX01段階に位置付けられうると考えられる。しかし、そのメルクマールとなる塔の越遺跡出土資料(注11)と比較した時、S字甕や高杯において、より新しい様相を本遺跡出土資料に見出すことができ(注12)塔の越SX01段階でも新相に置くべき資料と言えよう。

また、今回の出土資料で、特に注目されるのは、尾張地方で初めて出土した畿内系小型 鉢の存在であろう。浅い椀状の体部に、口縁部が鋭く2段に屈曲する独特の口縁部を有す るもので、布留式土器を特徴づける器種とされてきた。(注13)今、本遺跡より出土した小型鉢を 畿内寺沢薫氏編年に対比させるならば、布留 I 式2式に併行すると考えられ、本資料によ り尾張と畿内との編年的対応がより明瞭となったと言えよう。

3 西北出遺跡溝B出土遺物の編年的位置付け

西北出遺跡溝 B出土土師器は、従来、大参義一氏編年(注15)の石塚期の内容を充たす資料とされてきた。しかし、近年、土師器編年研究の進展に伴い、大参氏の編年案に対する疑問・矛盾が出され、西北出遺跡出土資料に関しても見通しが迫られることになってきた。そこで、最新の研究成果を参考にしながら、その編年的位置付けを再考してみたい。

土器の組成をみると、壺・甕・高杯・小型丸底土器などがあるが、量的にも少なく器種構成上欠落する部分も多い。しかし、それらの土器は、塔の越SX01段階に後続し、"様式移行期の様相を示す土器群"とされた(注16)ように興味深い情報を内包していると言えよう。その特色をまとめると次のようになる。

- ①扁平な体部と大きく開く口縁部を持った小型丸底土器が存在する。
- ②二重口縁壺は、退下した形状を示す。
- ③S字甕は、すべてD類に相当する。

- ④高杯は、脚部が屈折して開く"畿内型高杯"に変化し、在来系のものは全くない。
- ②~④は、元屋敷様式にはみられないものであり新しい要素と考えられる。それに対し、①は形態的には古い特徴を残しているのであり、①の取り扱いが問題となろう。しかし、この小型丸底土器は、調整技法の省略が顕著に認められるのであり、元屋敷様式後半に位置付けられた岩倉城遺跡下層出土の小型丸底土器との間に、大きなギャップが存在する。よって、西北出遺跡溝B出土資料は、元屋敷様式のカテゴリーには含めず、加納俊介氏や赤塚次郎氏も指摘される(注17)ように、元屋敷様式の後続様式の初頭に位置付けるのが妥当と考えられる。また、尾張地域で西北出遺跡出土遺物に併行する資料をあげるならば、朝日遺跡63 B区 S Z 01上層出土の土師器類が該当すると思われる(注18)

最後となりましたが、小論をまとめるにあたり、赤塚次郎氏には数々の有益な御教示と 御指導を賜り、岩倉市教育委員会、浅野清春、加納俊介、金子健一、神谷友和、松原隆治 の各氏・機関より御助言と御協力をいただいた。記して感謝いたします。

註

- (1) 「廻間遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター年報-昭和60年度』 1986
- (2) 塔の越遺跡発掘調査団他『塔の越遺跡発掘調査報告書(II)』 1988
- (3) 名古屋市教育委員会『若葉通遺跡発掘調査の概要』 1989
- (4) 第3図1は、欠山期特有の深い杯部に、外折れ矮小化した脚部を有する。小型高杯の祖型と考えられる 資料である。
- (5) 第5図9のみ検出時に取り上げたものである。その出土地点は、小型精製土器群が出土した範囲から、大きく逸脱するものではない。
- (6) 赤塚次郎「S字甕覚書'85」『愛知県埋蔵文化財センター年報 昭和60年度』 1986 以下、S字甕分類はこれに従う。
- (7) 西北出遺跡の概要については、浅野清春・安達厚三「西北出遺跡出土の土師器」『いちのみや考古』No.18 1971を参考にした。
- (8) 再実測を許可して下さった浅野清春氏、実測場所等の便宜をはかっていただいた岩倉市教育委員会に御礼申し上げます。また、出土遺物中1点のみ実測することができなかったので、注7文献よりその図を掲載しておく。
- (9) 欠山期まで、時期は遡るが、自然堤防上にのる89A・B区において竪穴住居を8棟、旧流路対岸の89F区で方形周溝墓を1基検出している。
- (10) 赤塚次郎「東海」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』 1989
- (11) 注2に同じ
- (12) S字甕は器壁の厚化が顕著となり、体部最大径も中位にまで下がる。また、SX01出土の椀状杯部を持つ高杯は、脚部での屈折が認められなくなり、SE01の脚部が外反する高杯は、短脚の傾向をみせる。
- (13) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』 60巻 2 号 1974
- (14) 寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県教育委員会 1986
- (15) 大参義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論 集』47 (史学18) 1968
- (16) 加納俊介・浅野清春・北村和宏「愛知県岩倉市小森遺跡出土の土 器」『古代』86号 1988
- (17) 加納俊介「古墳時代の土器」『断夫山古墳とその時代』第6回東 海埋蔵文化財研究会1989及び注10文献
- (18) 「朝日遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター年報-昭和63年度』 1989

